

第1章

宇治市の概況

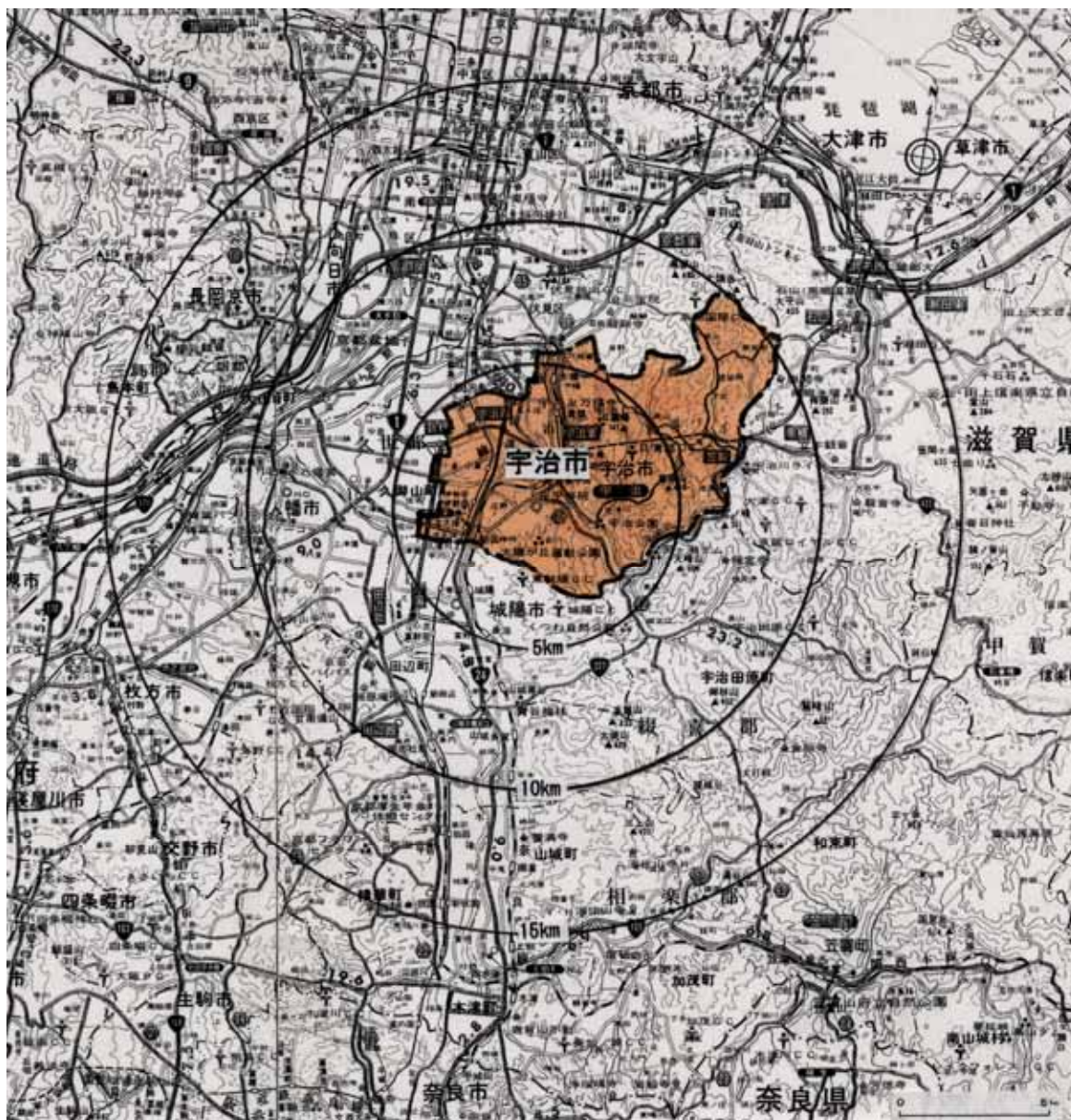
第1章 宇治市の概況

1-1. 位置

宇治市は京都盆地の東南隅に位置し、市域の西北部は京都市、西側に久御山町、南に城陽市、東に大津市、宇治田原町に接しています。面積は 67.54 km²で、東西に 10.0 km、南北に 10.7 km とコンパクトな都市であり、京都市中心部や大津市に 10～20 km、奈良市まで約 25 km、さらに大阪市中心部には約 35 km と近接しています。

JR 奈良線、京阪宇治線、近鉄京都線などの鉄道が走り、京滋バイパス、国道 24 号、府道京都宇治線、府道宇治淀線、府道城陽宇治線などが道路交通網を形成しています。

すなわち、周辺大都市への交通が至便な地であり、大都市近郊の住宅地としての性格が強く、それは 1960 年代（昭和 30 年代後半）からの市域の急激な宅地開発の進行とそれに伴う人口の急増に現れています。



1－2．地形的特性

宇治市は地形的に見れば、東部醍醐山地、中央部山麓丘陵地帯、西部沖積低地に概ね区分することができます。また市の中央部を南北に宇治川が流れ、沖積低地と山麓丘陵地に現在広がる市街地を大きく二分しています。

宇治川右岸の東部醍醐・笠取山地には山中に入りこむ川沿いに山間農地が発達し、現在でも田畑や杉の植林地などの広がる山里の風景を見せています。

宇治川右岸の中央部山麓丘陵地帯には、標高 200～20m程度の一帯に 1960 年代以降に開発された住宅地が広がり、山の辺住宅地景観を見せています。

京阪宇治線から宇治川に至る沖積低地では、自衛隊施設や工場、学校などとともに、住宅地や旧集落、田畑等が混在する地域となっています。

宇治川左岸は、主に標高 100m以下の丘陵地、低地で占められており、150～100mの間には、山城総合運動公園や植物公園があり、100～50mには比較的新しい住宅地が造成され、20m以下の地域には宇治橋商店街やユニチカ宇治工場などがあります。

それらの西側の低湿地帯には、埋め立てられた巨椋池干拓地をはじめ、大久保、伊勢田、新田などの旧集落とそれらが外延化した住宅地、自衛隊施設、工場群などがあります。

1－3．気候、植生

垂直的变化に富む宇治市の気候は、平地と山間部でかなり異なります。平地部の平均気温は京都市よりも高いですが気温の年較差がきわめて少なく、京都市のような準内陸盆地的性格は見られません。降水量は京都市より少ないですが湿度の平均は京都市よりも高く、特に冬季に高くなり、それが「宇治川の川霧」を発生させ、茶の生育にも役立つといわれています。

市域の現存植生は概ね代償植生であり、山地のそれは地域の「里山の景観」を代表する植生といえます。標高 500～300mの東部山地では、常緑広葉樹のコバノミツバツツジ・アカマツ群集（アカマツを代表とし、タムシバ、コナラ、リョウブ、ヤマウルシ、コバノミツバツツジ、ヒサカキ、ヤブツバキなど）及び落葉広葉樹のアベマキ・コナラ群集（コナラ、アベマキ、クリ、リョウブ、ヤマザクラなど）が卓越し、杉の植林地も多く見られます。

西部低地はほとんど市街化されていますが、農地などではカラスビシャク・ニシキソウ群落（畑地雑草群落）が見られます。また、宇治陵やいくつかの社寺林は、いわゆる照葉樹林（シイ、カシ、クス、ヤブツバキなど）で覆われているところもあり、市街地の貴重な緑の景観となっています。

1-4. 土地利用

市域のおよそ東半分は山間地であり、農村集落が各河川沿いに散在しています。このエリアは概ね山林、田畑となっています。

山地から西に向かって丘陵地、段丘、一般低地、干拓地や低湿地と移行しますが、丘陵地以西は大半が宅地化されています。

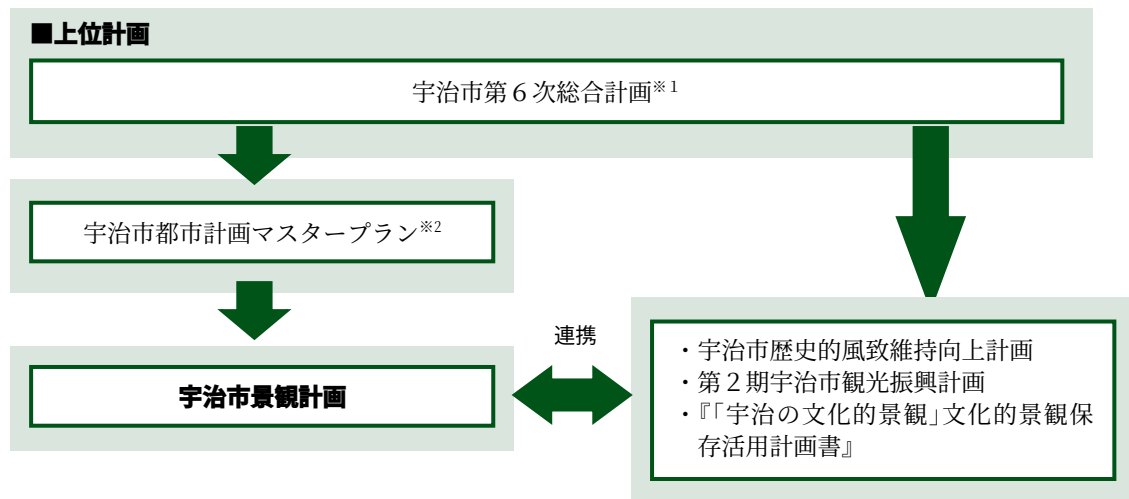
北西端には、水田を中心とした大規模な農地が広がっています。



■将来的な土地利用ゾーン区分図

1-5. 景観計画と関連計画

既存計画（上位・関連計画）との関係



※1 宇治市第6次総合計画（令和4年度（2022）～15年度（2033））

宇治市のまちづくりの最上位計画であり、「一人ひとりが輝き 伝統と新たな息吹を紡ぐまち・宇治」を目指す都市像としています。

※2 宇治市都市計画マスタープラン（令和4年(2022)～24年(2042)）

都市計画の将来方向を示す計画で、都市計画の基本となる土地利用や都市施設、都市景観形成、市街地整備など「ともに築く 魅力ある未来への都市」を都市づくりの基本理念としています。

【景観計画とは】

景観法^{※3}に基づき、景観行政団体^{※4}が景観行政を進める上で定める基本的な計画です。景観行政団体が策定し、区域や一定の行為に対する届出・勧告の基準等を定めます。

※3 【景観法】（平成16年6月18日法律第110号）

都市、農村漁村等における良好な景観の形成を図るため、良好な景観の形成に関する基本理念及び国等の責務を定めるとともに、景観計画の策定、景観計画区域、景観地区等における良好な景観の形成のための規制、景観整備機構による支援等所要の措置を講ずる我が国で初めての景観についての総合的な法律です。

※4 【景観行政団体】

景観行政を担う主体です。政令市、中核市、都道府県は、自動的に景観行政団体となり、その他の市町村は、都道府県知事との協議・同意により景観行政団体になることが可能です。

1-6. 歴史的変遷

宇治の歴史は古く縄文時代にさかのぼります。市内の遺跡からは縄文式土器や磨製石器片が出土し、この時期には居住が始まっていたことが確認されています。古墳時代には、豪族の墓と思われる古墳群が出現しています。こうした古墳群が存在することは、奈良、京都の中間に位置する宇治が地理的に重要な場所であったことを物語っています。特に、大化2年(646年)僧道登によって宇治橋が架設されたことにより、交通の要衝としての宇治の重要性は高まりました。

また、単に交通の要衝であっただけでなく、宇治は風光明媚な地として貴族の別業地でした。平安時代には、藤原道長が宇治川の西岸に別業を構え、後、頼通が「平等院」を建立しました。現在も阿弥陀堂(鳳凰堂)は当時の建築物としての全容をとどめています。さらに、世界的にも優れた女流文学と評される紫式部『源氏物語』の最後の十帖が宇治を主な舞台として展開されています。

ところで、宇治は要衝の地であつたがゆえに戦の場ともなりました。特に、中世には「源平合戦宇治川の先陣争い」で有名な宇治川の合戦や承久の乱、応仁の乱、山城国一揆等が起こり、室町幕府が滅ぶこととなった槇島の合戦が戦乱をしめくくりました。

しかし、豊臣秀吉が伏見城を築城し城下町を建設するにあたり、宇治の環境は一変しました。伏見に交通を集中させるため太閤堤築提の大土木工事により、巨椋池に流れ込んでいた宇治川が切り離されると、半ば独立した湖沼となった巨椋池の洪水の被害は増し、農地の水没を繰り返すようになりました。また、宇治橋を一時撤去したことで、京都奈良間の交通は宇治を経由することがなくなりました。(この撤去された宇治橋は5年後の慶長4年(1599年)、徳川家康によって元通りに復旧されました。)

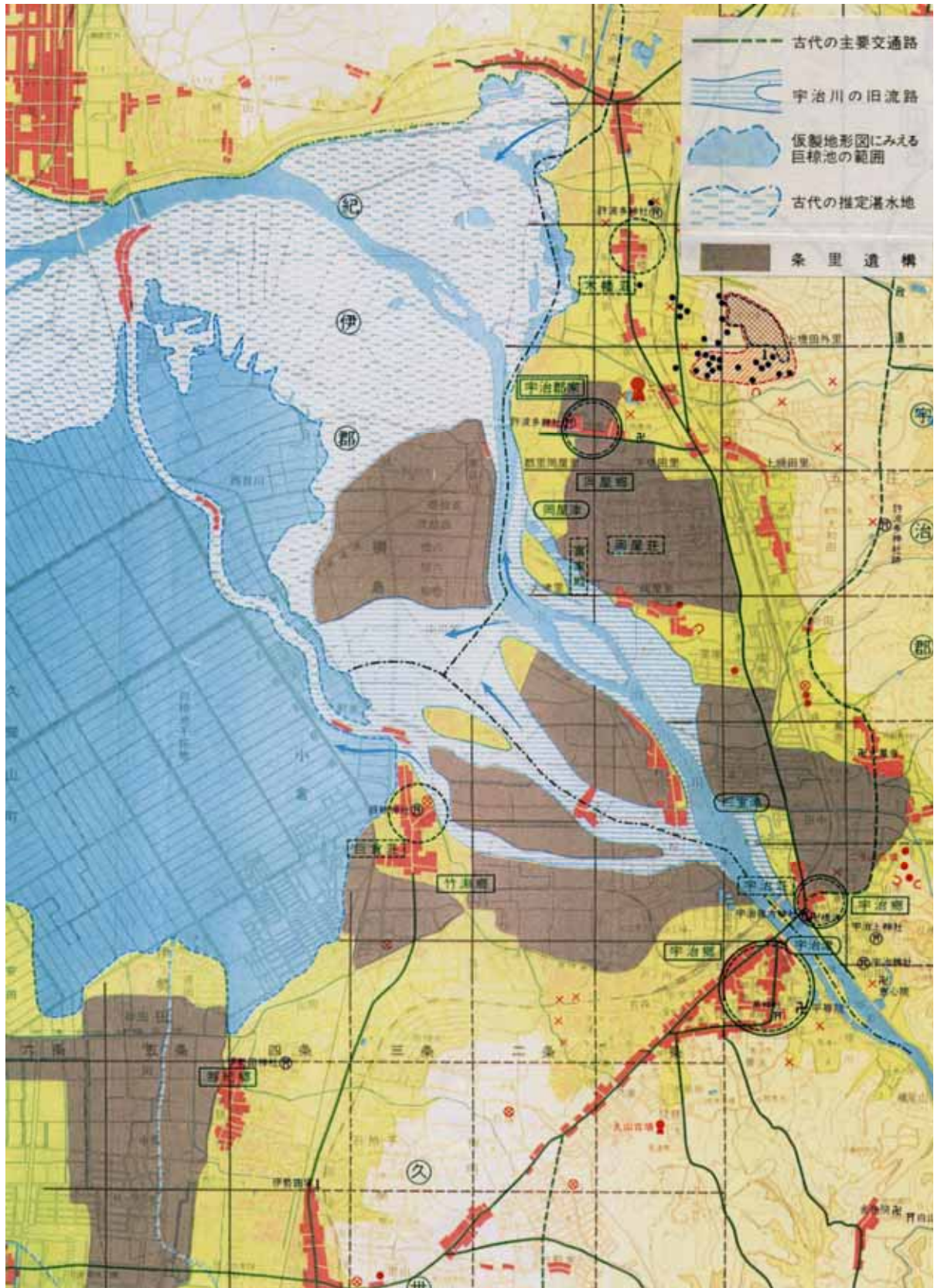
こうした不利な状況を克服し、宇治の繁栄を支えたのは茶業でした。室町時代以降、宇治は茶の名産地として全国に知られていましたが、江戸時代には徳川幕府によって手厚く保護され、御用茶師の頭取が宇治代官を勤めるといふ、行政と産業が一体化した特殊な支配のもとで「宇治茶」の繁栄がもたらされました。

明治に入ると、宇治川改修事業等が進められ、昭和の初期には、巨椋池干拓事業の推進や鉄道交通体系の形成などにより、宇治市の都市としての基盤が築かれました。そして昭和26年(1951年)3月1日には、東宇治町、宇治町、槇島村、小倉村、大久保村の2町3村が合併して市制を施行、宇治市が誕生しました。

以上のように、古くからの由緒ある歴史が語れる宇治市にあって、1994年12月には「平等院」と「宇治上神社」が世界遺産として登録されました。世界遺産は、次のような選定基準に基づき、数多い文化財の中から選ばれています。

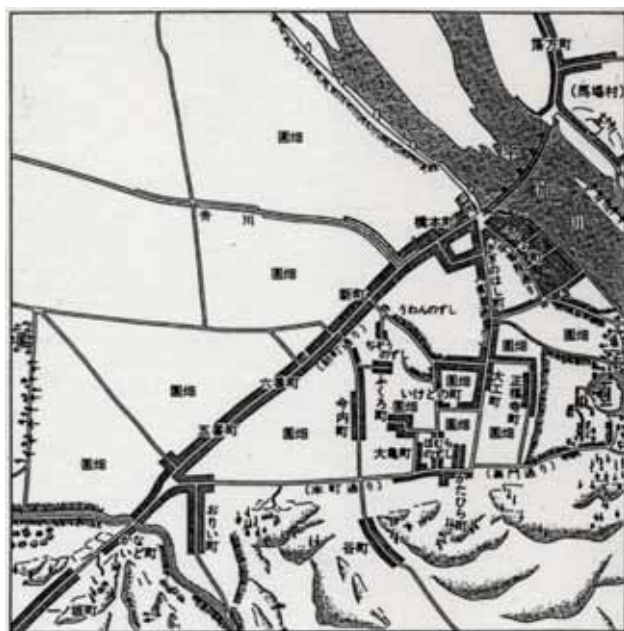
世界遺産の 選定基準 (「古都京都の 文化財」より)	①世界遺産が不動産に限られているため、建造物、庭園が対象
	②国内で最高ランクに位置づけられている国宝(建造物)、特別名勝(庭園)
	③遺産の敷地全域が史跡に指定されているなど、遺産そのものの保護の 状況に優れていること

【古 代】



(出典：宇治市史)

【近世初期】



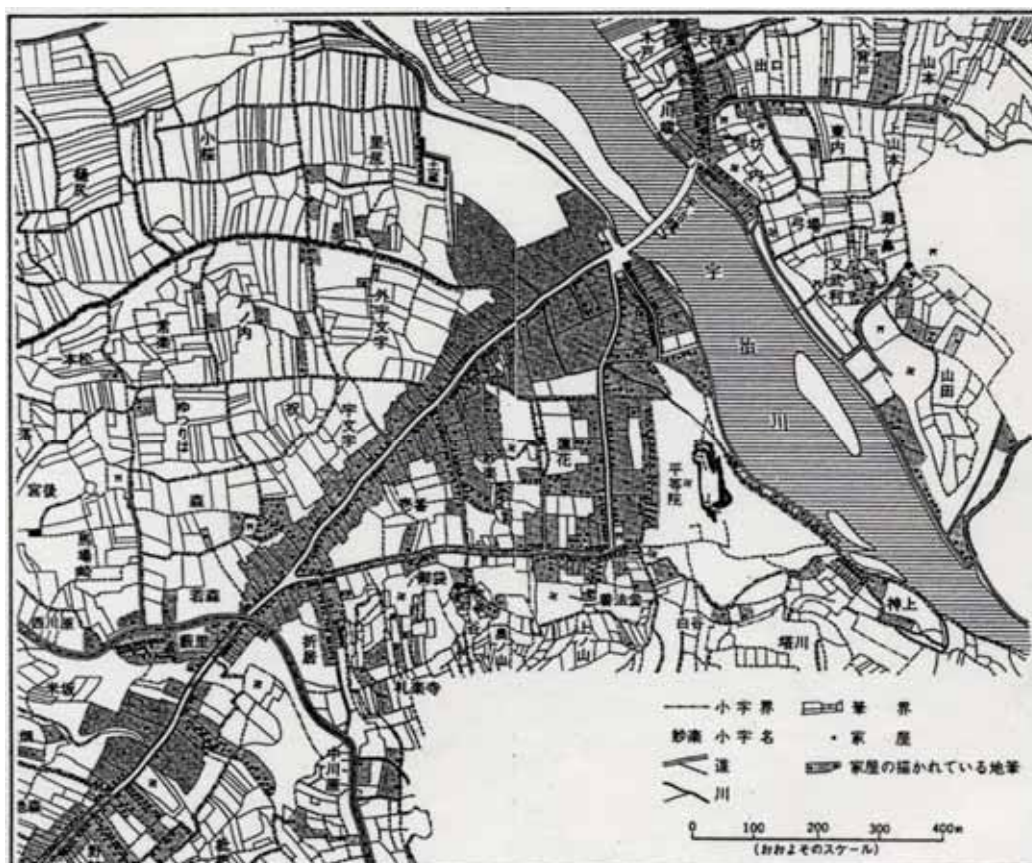
(出典：宇治市史)

【大正末～昭和初期】



(出典：宇治市史)

【18 世紀前半】



(出典：宇治市史)

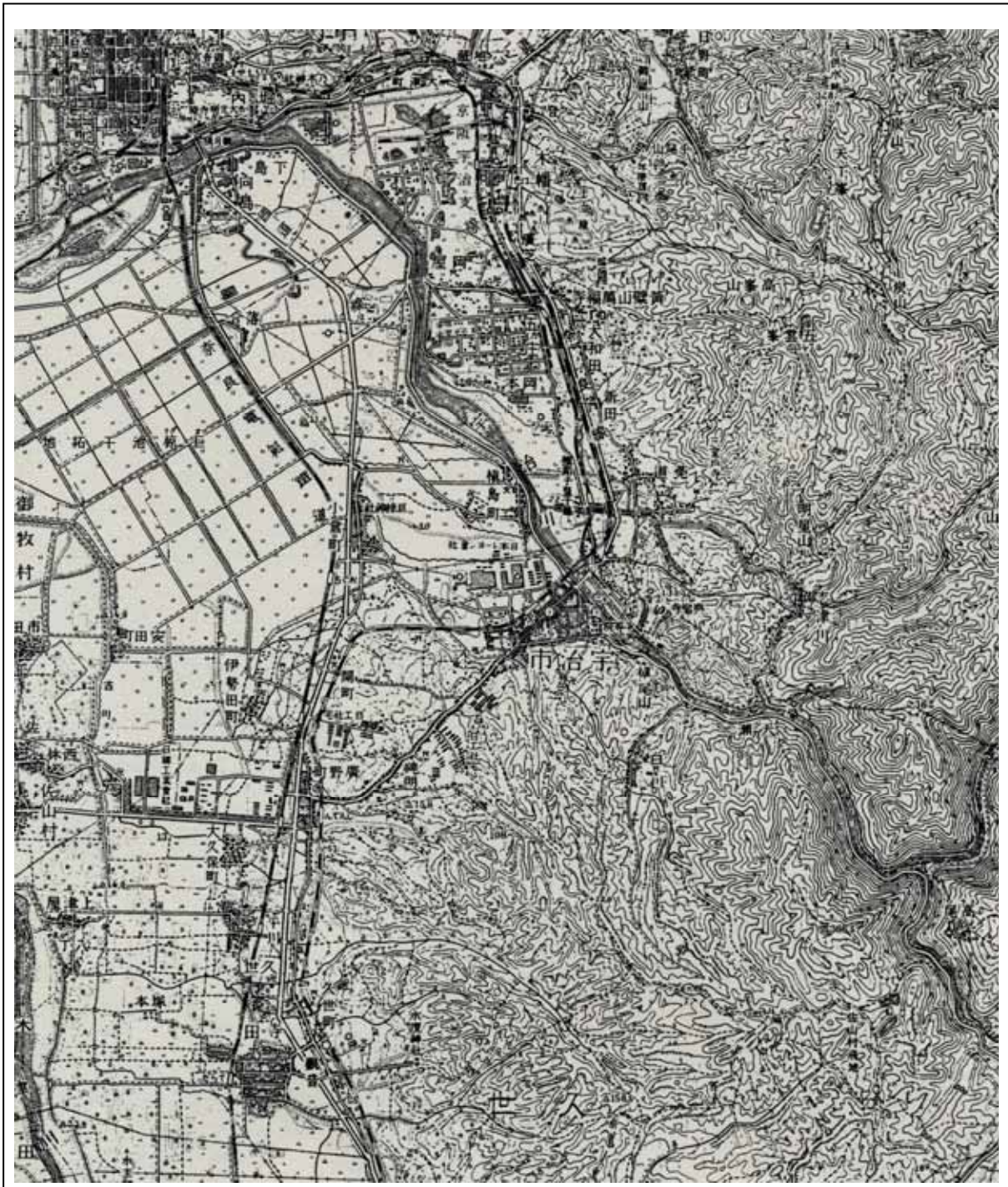
【昭和7年】



出典：『日本図誌大系 近畿Ⅱ』（山口恵一郎編集者代表.朝倉書店）

昭和7年の地図(5万分の1)では、巨椋池が存在し、奈良電鉄（現近鉄京都線）並びに大和街道沿いに小倉、伊勢田、大久保等の集落があり、奈良街道沿いにも北の六地藏から南の新田まで街道沿いのまちなみが形成されています。山麓には木幡、大和田、大鳳寺など集落も見え、平等院一帯はすでに大きな町を形成しています。

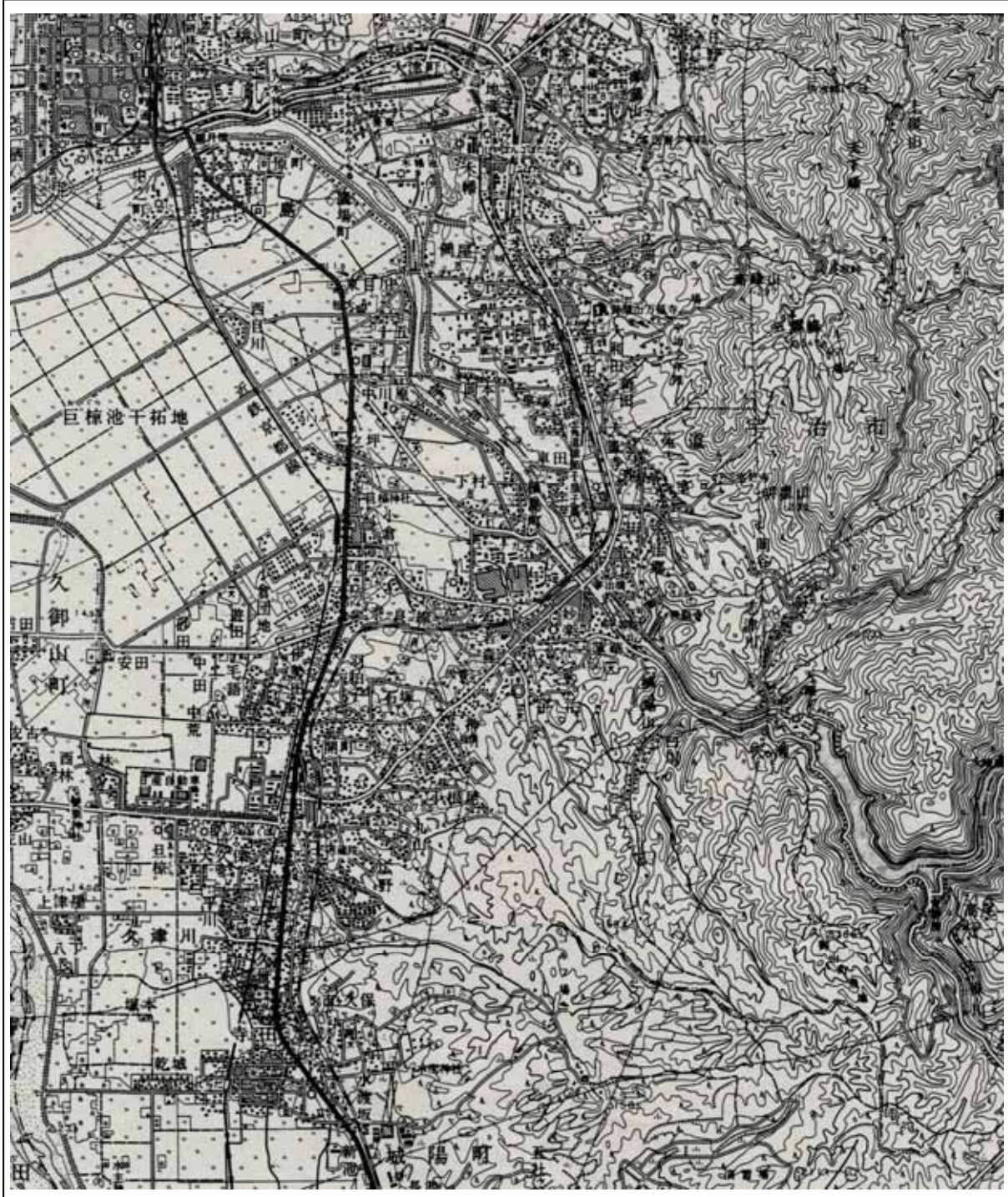
【昭和 27 年】



出典：『日本図誌大系 近畿Ⅱ』（山口恵一郎編集者代表.朝倉書店）

昭和 27 年の地図(5 万分の 1)では、巨椋池は埋め立てられ、干拓地となっています。これは、巨椋池の水位の低下とともに水質が悪化し、漁獲量の減少やマラリアの発生などの弊害が起こり、水害も繰り返されたためです。このため、生活の安全向上を願う周辺住民の運動により国営干拓事業が開始され、昭和 16 年に農地へと転換されました。木幡池周辺も干拓が進むとともに工場の立地が見られるようになります。

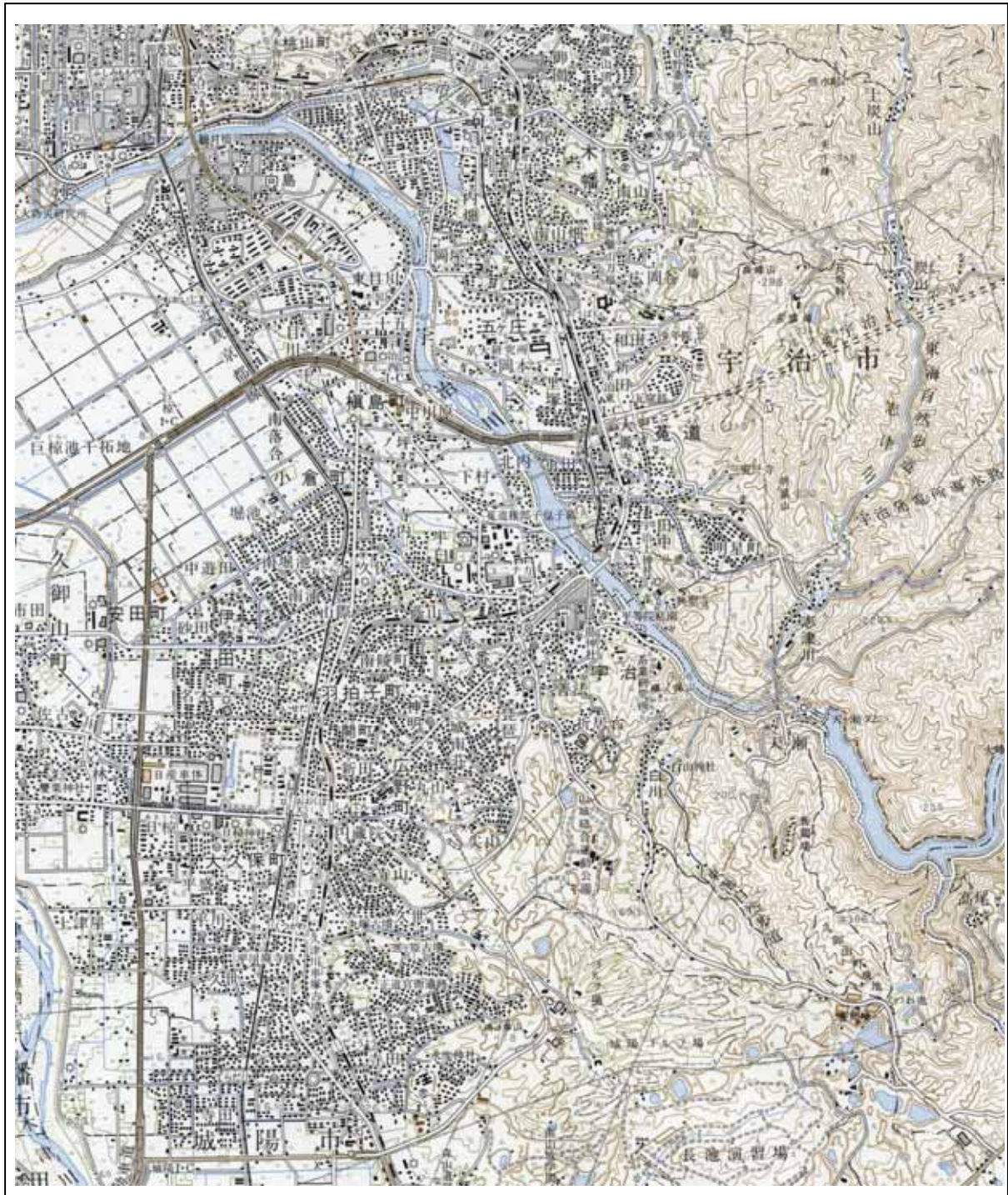
【昭和 44 年】



出典：『日本図誌大系 近畿Ⅱ』（山口恵一郎編集者代表.朝倉書店）

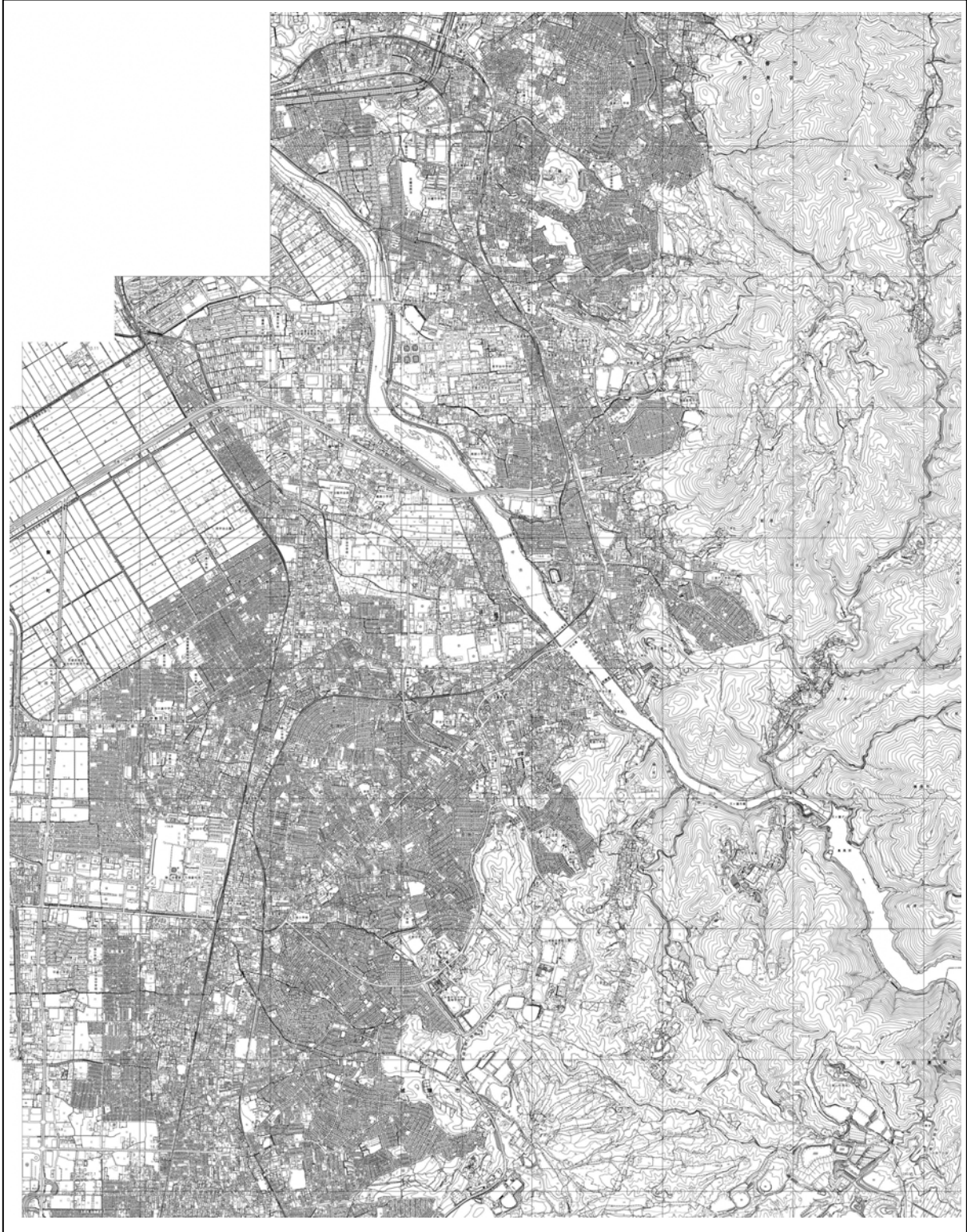
昭和 44 年の地図(5 万分の 1)では、かつて農林地であった低地から山麓地にかけて市街化が進み、特に山麓景観の変化が著しく現れています。六地藏東山麓一帯、JR 奈良線と近鉄京都線に挟まれた一帯、大久保の東山麓一帯の開発が顕著です。また、天ヶ瀬ダムができあがっています。宇治市の人口は約 9.7 万人となっています。

【平成 5 年】



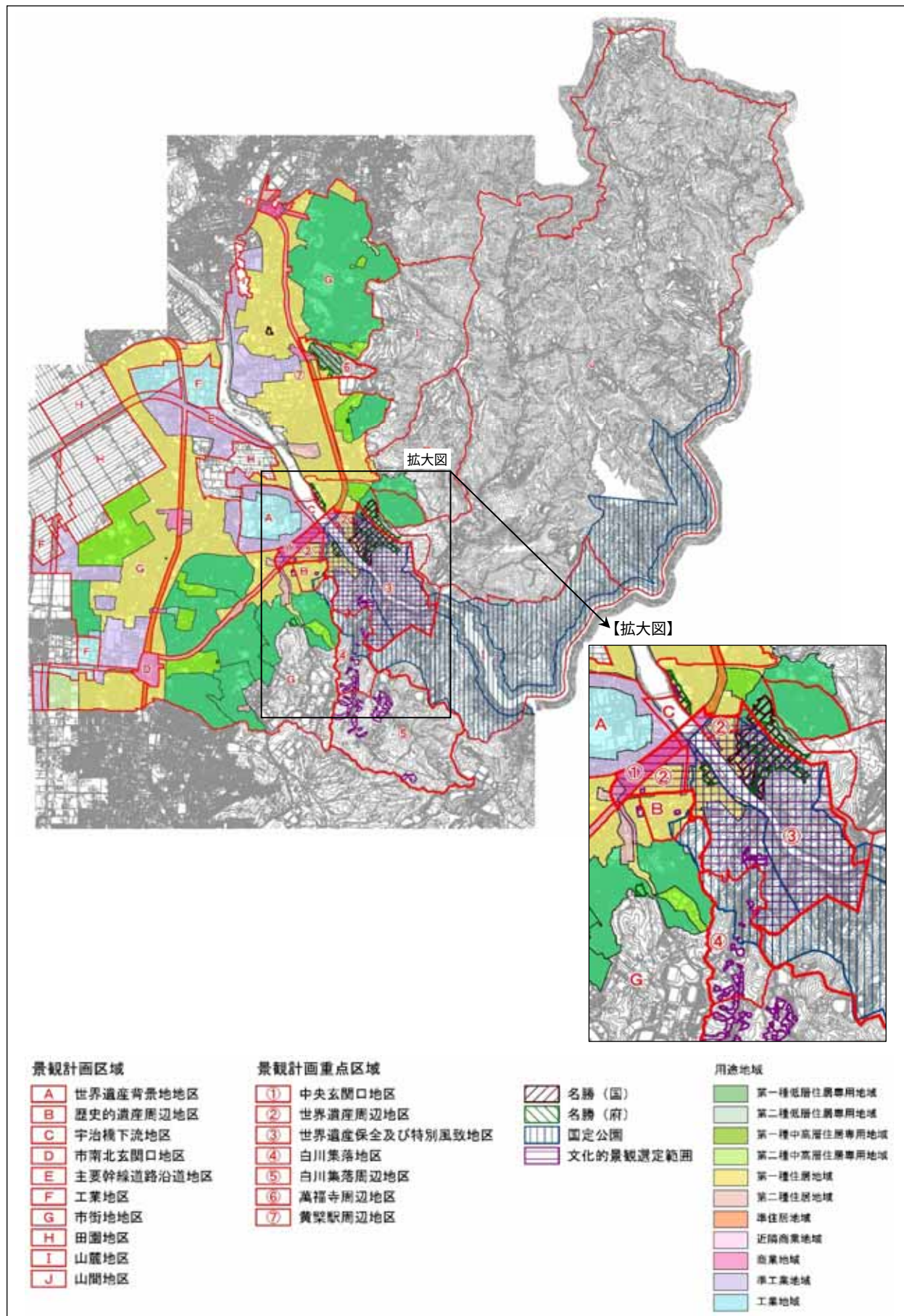
平成 5 年の地図(5 万分の 1)では、巨椋 IC が完成するなど交通の利便性が向上しました。昭和 30 年代頃から都市計画法が施行（昭和 44 年 6 月 14 日）されるまでの間、無秩序に開発が進められ、市街化が広がりを見せています。また人口は約 18.2 万人となっており、昭和 44 年と比較すると約 1.9 倍に増加しています。

【平成 30 年】



平成 30 年の地図では、ほぼ現在の姿が見られます。近世初期に見られる奈良街道や大和街道などの旧街道筋は今も残り続けています。人口は約 18.7 万人で、平成 5 年と比較すると微増となっています。

【都市計画等の状況と景観区域の重ね図】



景観計画区域図（令和5年度まで（2023年度））

